

藤縄謙三先生の思い出

大戸千之

藤縄謙三先生は、長きにわたって日本西洋古典学会に大きな貢献をされた。お若いころから、先生の先生にあたる年齢の先生方にまじり、歴史学分野を代表するかたちで、諸委員会に出席され、役割をはたされた。

先生が亡くなられてから、数えてみるとはや17年になる。時の過ぎるはやさを思わざるをえないが、いま求められるままに、あらためて先生が歩まれた道をたどり、個人的な思い出をつづってみたい。

先生は、1929年12月15日新潟県でお生まれになった。

幼少の頃をすごされた農村の様子については、文芸誌『群像』に連載されたエッセイのなかで回想されている。それは、柳田国男の随筆「美しき村」に出てくるような、水田が広がり小川が流れ、大きく茂る木立と古めかしい民家が並ぶ村であった。しかし、それはまた、長塚節の『土』に「登場する人物たちを、自分の村に見かける誰々と重ね合わせながら読んだ」、と書いておられるような村でもあった。「その後の私の人生観に、この作品（『土』）は根本的な影響を残した。」それは、のちになって西洋文化の研究へと向かったとき、「一種の後めたさを感じた」ほどであった（1）。先生の原点といえるかもしれない。

旧制新潟高校のとき、図書室から借り出して読んだ菊池慧一郎訳のプラトン『プロタゴラス』の内容には親しめなかったが、京都大学に入学してから『ソクラテスの弁明』や『饗宴』を読み、ギリシアへの愛着が決定的となった。さらに田中美知太郎『ロゴスとイデア』を読んで強くひきつけられ、志望専攻をきめるにあたって、いったんは「西洋哲学史」と書いて提出したのだが、「一昼夜いろいろ考えた末に」、田中先生についていく自信がもてなくなって、「西洋史」に変更したのだ、とお書きになっている。しかし、田中先生からはギリシア語を学ぶとともに、さまざまなかたちで指導を受けることになった（2）。

1953年に学部を卒業され、ひきつづき大学院に進学、1955年9月に博士課程を中退して、大阪府立大学教育学部助手とられた。

大学院に進まれた頃には、史学史、とくにトゥキュディデスの研究に打ちこまれた。先生ご自身の言によると、さらにスケールの大きな史学史研究をめざし、

ヤコービの『ギリシア史家断片集』を入手されたりしたが、研究の困難さを知って断念(3)、やがてホメロス研究に打ち込まれるようになる。

周知のように、その頃ミュケナイ社会の研究に画期的な動きがあった。線文字Bの解読についてのM. ヴェントリスとJ. チャドウィックの有名な論文が *Journal of Hellenic Studies* 誌上に掲載されたのは1953年、先生が大学院に進まれた年である。そして、解読の正しさが認められるのと呼応するように、ホメロス研究もまた、あらたな進展をみせていた。そうした状況のなかで、先生は意欲的に研究に取り組み、「ホメロスと戦車」(『西洋古典学研究』第9巻、1961年)、「ギリシアの英雄叙事詩の社会的基盤(上)(下)」(『史学雑誌』73編8・9号、1964年)などのすぐれた論文を発表された。

それは、わたしが研究者の道を歩みたいと願うようになった頃であったが、『史学雑誌』の「回顧と展望」号で、きびしい批評をなさることも多い村川堅太郎先生が、つづけて賛辞を書かれている(4)のを読み、こういう論文を書くことができたらと強く思ったことを、いまもよく憶えている。

両論文を書かれて間もなく、先生は最初の著作である『ホメロスの世界』を世に問われた。後年ふりかえって「最も心血を注いで書いた著作」(5)とおっしゃっている作品で、30代半ばの若々しい感性による新鮮な読解が高い評価を受けた。太田秀通先生が書評でいわれているように(6)、登場する人物の「精神や性格の内部に入りこみ、これを主体的に内面化している」ところが魅力で、「文学作品として現代人にも意味があるような解釈を試みる」(7)という藤縄先生の意図が、読者に直截に伝わってくる。

しかし、その頃すでに、先生は健康の問題で苦しまれるようになっていた。

わたしの記憶のなかでは、1964年の暮れに、胃潰瘍が昂じて入院された(8)のが最初であるが、不調はそれ以前からあったのかもしれない。そして、その後も健康上の悩みはずっとつづいたようで、とくに晩年には、隠さずつらさを訴えておられた。

藤縄先生は多数の著作をのこされたが、それらは、節制と克己によって体調の問題とたたかいながら生み出されたのである。最初の入院のとき、先生はまだ結婚されていなかったので、「準備などどうしているか、前日心配になって様子を見にいったら、いつもとちっとも変わらず、机に向かって勉強していたので、驚いたんですよ」と、親しかったドイツ現代史の中村幹雄先生(奈良女子大学)が話しておられた。そうした姿勢は生涯つづいたのだと思う。お仕事の多さと博大な学識に驚嘆する声をきくたびに、わたしには中村先生の声が耳元にひびいてくる

気がしたものである。

1970年京都大学に移られて、翌年には『ギリシア神話の世界観』を刊行された。岡道男先生の適確な紹介を拝借すれば、「ギリシア神話の多様さは歴史的観点から見るとギリシア民族の成立の複雑さの反映といえる」が、「同時に、そこにはギリシアの風土から生れた独特の神観念、数世紀にわたる文学・芸術による彫琢、さらに現実の生活・社会の投射すら認めることができる」のであって、「神話研究が常に直面する課題は、いかにこの複雑多岐な世界を整理して考察するかにあるが、本書においては、ギリシア神話の成立から古典期における完成にいたるまでの過程がじつに見事な叙述によって示されている。」(9)そして、さまざまな古典作品を縦横に引用しながら、解釈し論じていく藤縄先生独特のスタイルが、この作品で確立された。

その後も先生は、数多くの著作によって、ギリシア文化史に独自の境地を開かれた。どの著作も、清新な着眼と博識に裏づけられた独自の考察で、読むものをひきつけた。とくに、1974年に刊行された『ギリシア文化と日本文化—神話・歴史・風土—』では、まったく異質とみえる二つの文化を、外見的にではなく内面的に比較考察して、多くの人にあらたな驚きをあたえた。ギリシア史を専門としながら和漢の文化にも造詣がふかいことに、感嘆の声があがった。

しかし、藤縄先生の日本文化への関心は、年季が入っていたのである。おぼろな記憶を頼りに調べてみると、1964年発行の同窓会誌に寄稿されたエッセイで、日本における西洋文化摂取のしかたについて論じておられ、末尾に「日本史を見直すという課題を考え出してから、もう5年も過ぎた」という一文がみつかった(10)。「もう5年」というのが、なにを起点としてのことか、よくはわからない。が、さらにいうなら、本稿のはじめでふれたような日本の農村への愛着も、こうした関心につながってくることになりそうで、意識的に勉強されるようになってからでも、かなりの時間をへている、ということになる。

この本が出版された年の夏、先生ははじめてヨーロッパ旅行を経験され、さらに1977年春から2年間、ドイツとギリシアで在外研究の生活をおくられた。はじめの1年はマインツで、つづく1年はアテネで過ごされたが、ヨーロッパでの体験はきわめて強い印象をのこしたと、ご自身お書きになっている(11)。

この経験は、その後の思索にもさまざまな影響をあたえているであろうが、いまは詳細にたどる準備がない。ただ、在外研究がもたらしたものとしてお話しになったことのひとつに、ヘロドトスの記述のしかたの問題がある。彼は「目撃し

たことはほとんど記述せず、・・・伝聞ばかりを記録している。」(12) これは、ある研究会の席上、「このことがわからなければヘロドトスはわからない」とまでおっしゃった発見なのであるが、在外研究にさいして、せつかくの機会だから、ヘロドトスが見たものを追って各地を歩いてみよう、と考えたときに気づかれたのだそうである。

ギリシアではあちこちを訪ねられ、とくに島々の訪問には頑張られたと聞く。帰国後の土産話によると、ホテルの予約をせずに出かけたところが、どこにも空室がなくて、頼み込んで廊下で寝させてもらった、というようなことまであったらしい。だんだん旅慣れしてきた頃の失敗談であろうが、そのときの先生の対応ぶりを一同想像して、話をきく座がなごんだものである。

ヘロドトス研究は、1989年刊行の大著『歴史の父 ヘロドトス』として結実する。あとがきでお書きになっている「私は長い長い旅路から疲れ果てて故郷へ辿り着いたような感じである」という感懐は、まことに印象的であった。「書くべきことは、洩らさず書いて、なるべく堂々たる本に」という書肆の期待に応えようと、思いのたけを書ききられたのであろう(13)。

この本では、ヘロドトス『歴史』の内容をさまざまな角度から解説・考察したあと、第五部において、ヘロドトスの同時代からはじまる受容・評価・批判の歴史がたどられている。そこで示されている膨大な読書量に、多くの人が賛嘆の声をあげたが、「たいしたものだ、といろんな人がほめてくれるんだけど、ぼくとしては、苦勞して書いたというよりは、自然に書けていった、という感じなんだよ」と、普段の調子でいわれたので、あらためて驚かされた。

さらに最晩年のお仕事として、トゥキュディデスの翻訳をあげておかねばならない。先生の研究生活は、史学史にはじまり史学史にかえったわけである。先生はこの仕事に全力をあげられたが、しかし、その途上、2000年10月4日に先生は亡くなられた。翻訳が前半を完成したところで終わってしまったのは、かえすがえすも残念なことであった。

先生の文章は、どれも一読して先生のものとなる独特の文体で書かれているが、きわめて平明でわかりやすいのが特長である。難解な文章を読まされる苦痛とは無縁であったから、専門外の読者にもファンが多かった。

お仕事の魅力は、繊細な感覚、斬新な発想、博識に立脚しつつ、しかも、それらに拘束されることのない自由な思索、というところにあった。先生の講義では、中世史や近代史をやろうとしている学生たちも数多く聴講したが、これは、そう

した先生の思索の魅力に惹かれてのことであつたらう。もちろん、定年退官の機会にもうけられた席上、「授業はいつでも全力投球だった」と述懐されていたように、淡々としているようでいて力がこもっている授業ぶりも、講筵に列するものにとって大きな魅力であつた。

ただ、先生の説明は、堅実な論証よりも直観や推測によっている場合が少なくない。これは文化史の本領でもあつたらうが、厳密な思考を求める立場から批判する声もあつた。あてはまらない例をさがすことがむずかしくないように思えるケースもあつたし、推測にすぎないといわれれば、そうかもしれない場合もあつたからである。しかし、それは、先生の議論が常に旗幟鮮明で明快であることを意図されたためでもあつたらう。ユニークな着眼や卓抜な議論のはこびは、いつも問題の本質にかかわるものであつたし、意表をつきながら説得力をもつ指摘のおもしろさこそが、先生のお仕事の魅力であつたといえるのではないか。先生のお仕事は、今後も長く読み継がれていくことであらう。

- (1) 「本に会うー田園文学への回想」、『群像』48-10(1993年10月号)、351-352 ページ
- (2) 「本に会うープラトンは親しき友」、『群像』48-12 (1993年12月号)、338-339 ページ
- (3) 『歴史学の起源』、あとがき、365-366 ページ
- (4) 1962年号247-248 ページと1965年号299-300 ページ
- (5) 第三版(新潮選書)あとがき、260 ページ
- (6) 『史学雑誌』75編6号、1966年、107 ページ
- (7) 第三版あとがき、259 ページ
- (8) 『ホメロスの世界』初版あとがきでもふれられている
- (9) 『西洋古典学研究』第20巻、1972年、128-129 ページ
- (10) 「漢魂洋才」、『読書会だより』第8号、10 ページ
- (11) 平凡社ライブラリー版、385-386 ページ
- (12) 『歴史学の起源』、60 ページ
- (13) 『歴史の父 ヘロドトス』、あとがき、539-541 ページ

* なお筆者は先生が逝去された直後に追悼の文章を書いたことがある(「本会元理事長 藤縄謙三先生を偲ぶ」、『史林』第84巻第2号、2001年3月、157-158 ページ)。本稿と相補うところもあるので、お読みいただければ幸いである。